

【授業実践の振り返り】 国語(光村)1年 「しらせたいな みせたいな」

時 限	内 容	活 動	有 効 で あ っ た 点	改 善 が 必 要 と 思 わ れ る 点	子 ど も た ち の 反 応
1	様子を表す言葉の学習	<p><めあて>よく見て書こう。</p> <p>①デジタル教科書のワークIを参考に、様子を表す言葉を集める。</p> <p>②メモを書くときどんなことが分かるか、どんなところがいいか、発表する。</p> <p>★言葉遊びゲーム「おもしろ文作り」</p>	<p>・まずは先教師が自分の様子について、「先生を見たら、どんな様子？」と子どもたちに尋ねたところ、「外から来て暑くて死にそう。」と答えることにより、授業に入ったところが非常にスムーズで良かった。やはり子どもたちにとって、身近に感じられるトピックから入ることで興味関心を引くことができる。</p> <p>・「秋を知らせるもの」をiPadのカラフルな画像で見せることで、子どもたちが「うわあ！」といっきにホワイトボードに引き付けられ、これから自分たちが何の題材について「様子を表す言葉」を学習するのが明確に伝わった。</p> <p>・画像だけでなく、教師が持参した「どんぐり、秋の実、秋の葉っぱ、秋の果物や野菜」などの実物を見せて、実際に触らせたことで、更に本単元の学習に興味を持たせることができた。</p> <p>★教師が「ぼくしか知らないから、教えてあげたいな！という気持ちを文にするよ。」と指示したことで、子どもたちの「おもしろ文作り」への期待感が高まった。</p>	<p>・教師が「秋を知らせるもの」をiPadで見せる前に「何があるかな？」と発問を投げかけ、隣の友達とペアで話して、その結果を紙に書いたり、口頭発表でクラス全体共有すると、更に子どもたちの活動が増える。</p> <p>★時間に余裕があれば、出来上がった文をホワイトボードに書いていくと、「文の組み立て」が分かりやすくて良いかもしれない。</p>	<p>・デジタル教科書「ワーク1」のモルモットの絵に興味を示し、「様子を表す」言葉についての発話が活発に行われた。視覚教材の効果は大きい。</p> <p>・挙手→指名→起立をしては発言→「はい、～です。」と文で答える→着席の流れが学習規律がしっかりと身についている。</p> <p>・教師がどんぐりや葉っぱをジップロックから出すたびに、「わあ！」と歓声が上がっていた。実物を使うと反応がとても良い。授業後には「授業で使用した秋を知らせるものが欲しい」と言い、みんなで分けて持ち帰った。</p> <p>★三色の短冊の言葉を継ぎ足して、面白い文ができるために、クラス全体が盛り上がり、子どもたちがとても楽しんでた。面白すぎて椅子から落ちる子どもがいたり、「もっとやりたい！」という声も多かった。</p> <p>★三色の短冊にそれぞれ指定された単語を書く課題は、書けるスピードに個人差があった。</p>
	家庭学習	<p>家の周りで秋を探して、教科書18ページのような絵とメモを書く。その書いたものと、題材にしたものを19日に持ってくる。(落ち葉、木の実、かき、ざくろ等)</p> <p>「ぼくの～」「わたしの～」を使うことによって、自分だけが知っているものを、教師や友達に教えてあげるといった状況を作る。</p>	<p>・自分が探した題材について、とても丁寧に、かつ色彩豊かに描かれていた。また、題材について、見た目や触った感じなど、様々な描写メモが書かれていた。</p> <p>・題材の絵とメモだけでなく、実物を持参した子どもたちもおり、それをクラスの友達に見せることで「ぼくの～」「わたしの～」伝えたいもの、という意識が高まっているように見られた。</p>		<p>・とても嬉しそうに、実物の題材をクラスの人みんなに見せていた。「自分で見つけてきた」という特別感が良いようだ。</p>

		例：私のうちの庭にはススキがあります。 ぼくは公園でどんぐりを見つけました。			
2	学習課題 をつかむ	①宿題で書いてきた絵とメモを見て短冊を作る。 ②短冊をもとに、文章を書く。 ③書いた文章を読み返す。	<ul style="list-style-type: none"> ・始めに、教師が自作（親近感がわく）のススキの絵とメモで短冊を書いて紹介したことで、子どもたちにとって「次に自分たちが何をするのか」の課題が分かりやすく示された。 ・題材を説明するための観点を「五感」（見た目、触った感じ、聞こえるもの、匂い、味）に注目して書くよう強調したことで、様々なメモが書けていた。使われていた表現も豊かだった。 ・宿題で書いてきたメモをもとに、授業中に「メモから複数枚の短冊へ文で書く」→「短冊の文を順番を入れ替えて、文章に組み立てる」→「その文章を原稿用紙に書き写す」とスモールステップを追っていたので、いきなりまとまった文章を書くことへの負担感が軽減されていた。また、自宅では保護者に頼ってしまいがちな書く課題を、何とか自分で書こうと努力している姿が見られた。 ・書き出しを「私（ぼく）は//の～」を使うことによって、自分だけが知っているものを教師や友達に教えてあげたいという意欲が高まり、明確な言語活動の目標が持てた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ホワイトボードに示された「～を～で見つけました。」や「～は～です。」の文例を見ただけでは、自力で文を書くことが困難な子どもたちへの手当てとして、「（ ）は（ ）で見つけました。」や「（ ）は（ ）です。」と書かれた（ ）埋めの短冊を用意するのも効果的だと思われる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自力で短冊にすぐに文が書けている子どもたちと、教師の一言アドバイスがあると書ける子どもたちと様々だった。 ・宿題で仕上げてきた題材の絵とメモ、それに授業中に書いた複数短冊を見ながら、一生懸命に原稿用紙に書き写している姿が印象的だった。よくがんばっていた。
3	お互いの文 文章の良 いところを 褒め合う	書いた文章を発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ・発表の最中に、それぞれの子どもが自宅で書いてきた絵とメモをプロジェクターで映したので、耳で聞くだけでなく視覚的にも内容が分かりやすかった。 		<ul style="list-style-type: none"> ・自分の発表は緊張気味でも、友達の発表を聞くことは楽しそうだった。友達が何についてどんなことを書いたかに興味津々の様子だった。